

パネル討論会 ①「布留里の夢を語る —ホタルが舞うまちづくり—」

日時 2004年6月20日(日) 13:00~15:30

場所 天理市文化センター

パネリスト

福井常夫氏(天理市助役)

吉岡 溥氏(天理市教育長)

荒木一義氏(奈良県生活環境部長)

朝廣佳子氏(NPO 法人なら燈花会の会長)

久保田有氏((財)日本自然保護協会自然観察指導員)

コーディネーター

中畠欣成(環境市民ネットワーク天理事務局長)



明治初期、布留川水系の三島川には、ゲンジボタルの中でも平均値より大型の個体群が分布していたことが知られている。明治10~20年代に天理教教会本部前にあった商店の古い看板に「三島名産 かのすのり なつほたる」と書かれてあった。これは、大和国の三島名産は、寒の素海苔と夏ホタルだと考えられている。

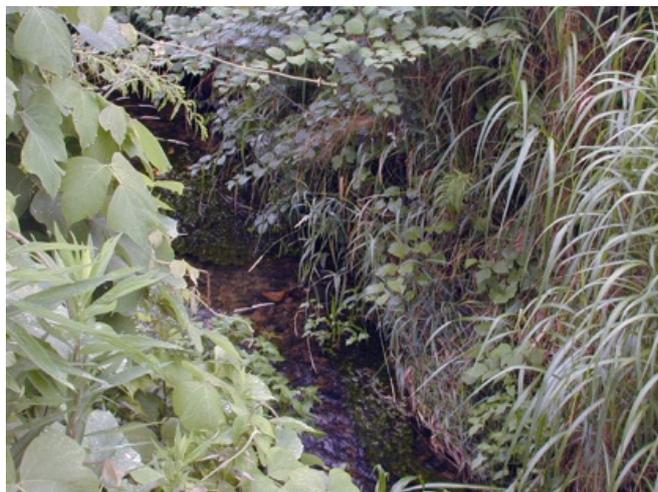
●福井常夫氏(天理市助役)

演題【ホタルが舞うまちづくり —雑感—】

私は奈良市街地で育ったが、昭和20年代の小学生のとき、歩いて5分も行かないところに田畑があり、タニシやザリガニ、メダカ、フナ、タガメなど、生きものがたくさん生息していた。今日、身近だった生きものとの関わりが、私たちから加速的に離れていくのが残念である。画一的、合理的な社会の形成に伴って、個々人もそのような考え方や行動が社会と同じ風潮になっているのが原因なのだろうか。

私は吉野川支流の丹生川でゲンジボタルの乱舞を見て感動したことを記憶している。10年ほど前の6月末、西吉野村でお通夜に行ったさいに見た何百匹もの幻想的な乱舞は、今も忘れていない。ゲンジボタルはきれいな水の流れが必要で、生活雑排水を河川に流さないとか、あるいは河川工事のさいにはコンクリートの三面護岸はしないとといった配慮が必要と考える。また上流部での緑化、とくに広葉樹の植林や治山工事が必要。

天理市内の布留川流域で「天理のホタル」が再生されてきた。これも市民の皆さまの布留川清掃や環境整備の結果であり、今後も、私は日本一住み良い田園都市・天理に向けて、微力ながら頑張りたい。



ゲンジボタルの飛翔が増えた布留川(左)と、昼間に葉の裏側で休息するゲンジボタル(右)。

●吉岡 溥氏（天理市教育長）

演題【天理の環境教育と今後の方向性】

今から 50 年ほど前、私のふるさと・柳本には、ホテルが乱舞する日本の原風景のような田園があった。しかし、大阪で万博が開かれたころからホテルが少なくなったように思う。その後、多くの人々の努力で再びホテルが舞う自然が取り戻せるようになってきたことは本当にうれしい。

環境破壊が進む今、環境と水に対する意識改革がなによりも大切だと痛感している。こんな時、天理市は平成 15 年からすべての小学校、中学校で文部科学省の研究指定を受け、全市レベルで環境教育に取り組むことにした。研究主題は「人間がたくましく豊かな生活が送れるような環境（自然・社会）を構成するには～学校から地域へ環境教育の広がり求めて～」と設定し、鋭意研究を行っている。

各学校の取り組みとしては、水生生物の調査や水質検査を行う布留川リバーウォッチング。空き缶やごみなどを拾い集めるクリーンハイキング。菊栽培やプランターでの花いっぱい運動等がある。また、地域の人と手をつないだ活動として、地域との触れ合い、自然体験を通じた環境保全活動がある。これらの活動を通して各校や地域がすばらしい成果を挙げることを期待している。

日本の田園、農村景観は日本人の心の原風景である。里山の自然を保持育成することや水田を保全することが、ホテルが舞う美しい自然を守ることになる。

●荒木一義氏（奈良県生活環境部長）

演題【身の回りのことから環境を考え、できることから少しずつでも実践を】

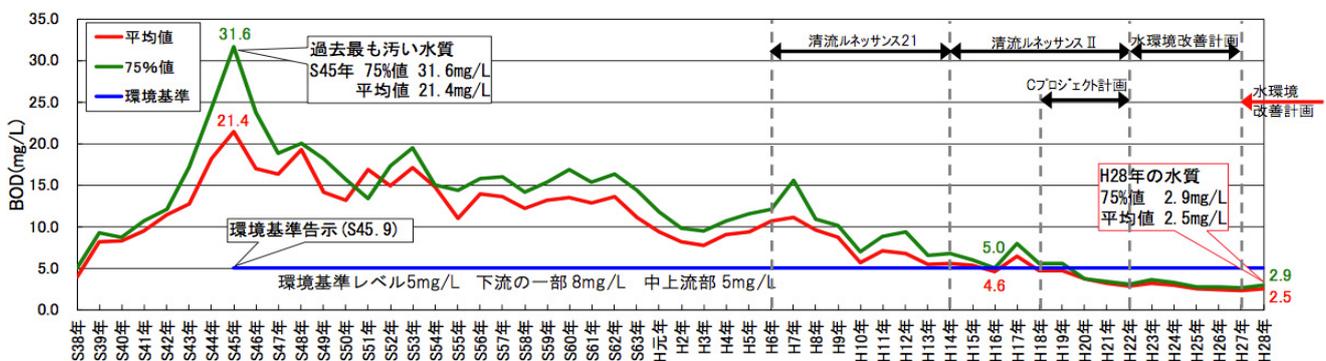
今日の環境問題は、地球温暖化のような地球規模の問題から、日常生活における身近な問題まで、極めて幅広い問題が含まれているが、これらの課題に対処していくためには、私たち一人ひとりが、現在の社会経済システムやライフスタイルを見直し、持続可能な社会の構築に向けて前進していかなければならない。

本県では、このような環境の保全と創造についての基本理念等を定めた「奈良県環境基本条例」、並びに環境施策の基本的方向と環境にやさしい行動を実践していく指針として策定した「奈良県環境総合計画」などに基づき、広範にわたる環境問題に対応し、行政、事業者及び県民がそれぞれの役割を担い、相互に協力・連携しながら積極的な取組を推進している。

大和川の水質の経年変化

近畿地方整備局

■水質の変化(BOD)



大和川本川の水質経年変化 (本川8地点の平均値)

布留川が属している大和川水系については、人口増に伴う生活雑排水による水質汚濁が進む一方、平常時は水量が少ないため川自体の浄化能力が低いという条件が重なる結果、水質汚濁の程度は以前に比して大幅に改善されているものの、水質汚濁の程度を図る BOD 値は全国でも最悪のグループに入っている。

県では大和川の水質浄化に向け、「万葉の清流ルネッサンス」計画を策定し、下水道・河川浄化施設等の整備や各種啓発活動等総合的に水質の改善に努めている。

最近の環境問題が複雑で難しいのは、私たちが被害者であることと同時に加害者になっていること。しかし、立ち止まっているだけでは何も解決はしない。身の回りのことから環境を考え、できることから少しずつでも実践行動をおこなうことが大切。

●朝廣佳子氏（NPO 法人なら燈花会の会会長）

演題【自然を生かしたまちづくり】

夏の奈良公園一帯をろうそくで照らし出す灯りのまつり「なら燈花会」を始めて、2004 年で6 年目となる。実は最初から、自然を生かしたまつりなどと考えていたわけではない。1300 年という壮大な歴史を持つ奈良の中で、新しいまつりを始めるのは決して容易なことではなく、あれこれ試行錯誤の末に生まれたのがろうそくを使うことだった。

1999 年7 月7 日、浮雲園地で 4000 個のろうそくを初めての試験点灯したとき、まるで天上世界のような美しい風景が現れたことに目を見張った。後ろの若草山、春日奥山を背景に、まわりは東大寺、春日大社、興福寺と世界遺産に囲まれ、夜は静寂と闇に包まれた空間だった。当たり前存在していたこの景観があったからこそ、ろうそくの灯りが映えること、結局、本物の自然の中でそれを生かすことが一番であることに気付いた。大きく手をいれず、この景観を今まで守ってきた先人に改めて感謝する思いである。

奈良は有形の歴史、文化財産を多数有するが、実は、今でも日本の原点を彷彿とさせる自然や空気、そこに生じる光や闇、音といった無形の財産が一番の宝物ではないかと、開催を経るごとに感じている。

●久保田有氏（財）日本自然保護協会自然観察指導員）

演題【ホタルが飛び交う「布留の里」の再生に向けて】

布留の里に人間が住み始めたのは、旧石器時代にさかのぼるといわれている。その後、縄文、弥生、古墳、飛鳥時代と重要な役割を果たす人々が、この地で生活をしてきた。これらの人々の生活を支えたのが、布留川の貴重な水だった。布留の社、今の石上神宮には、水を信仰の対象としてきた歴史がある。

ニイニイゼミ、オニヤンマ、ゲンゴロウ・・・そして、ホタル。ずっと人間のそばで生きてきた生き物たち。しかし、昭和 30 年代中頃からゲンゴロウやホタルは姿が見えなくなっていった。水道の普及などによる生活の変化、強力な農薬の使用による農業の変化などが大きな原因だった。そのホタルたちが、最近、市街地を流れる布留川でも姿を見せるようになってきた。やっと甦ってきた生き物たち、まだまだ姿を見せない生き物たち、これらの生き物たちは、我々人間に何を教えてくれるのだろうか。

人間の安全な生活を守るため、また自然の有効利用の名のもと、人間は自分たちの思うままに自然を造り替えてきた。一方で、人間は川などの自然から遠ざかる生活を続けている。山、川、海、そして里の自然が人間の心をいやす存在だった時代は、過去のことなのだろうか。私たちは何か大切なものを忘れてきたのかもしれない。「布留の里」で生きてきた人々は、水や緑を生かす工夫もしてきた。いろんな所にその名残を見ることができる。しかし、この数十年の間に、その先人たちの知恵とも言える遺産が次々と失われようとしている。

もう一度、「豊かな水と緑に包まれた空間」の再生について、一緒に考えてみませんか。